

小学校教師が捉える水泳授業への意識に関する研究

水泳学習で目指される2つの方向性との関係に視点をあてて

佐藤 悠太郎 (東京学芸大学大学院)

1. 目的

本研究は、小学校教師が捉える水泳授業の内容に対する意識について明らかにし、水泳授業で求められる「生涯スポーツへの発展」「自己保全能力の育成」という2つの方向性を視点としながら、水泳授業の現状及び水泳運動の学習指導について考察することを目的とした。

2. 研究方法

本研究では、質問紙調査及びインタビュー調査を行った。質問紙調査は、小学校教師が捉える水泳授業の内容に関する一般的な意識を把握するために、現役の小学校教員229名を対象に行った。またインタビュー調査は、教師が水泳授業で重要視する内容や求められる2つの方向性に関する意識、自身の実践を通じた水泳授業への意識の内実について迫るために、3名の小学校教師を対象とし行った。

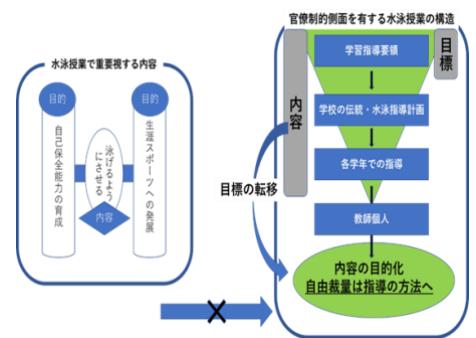
3. 結果及び考察

1) 小学校教師が水泳授業で重要視する内容

質問紙調査における因子分析及びインタビュー調査の結果から、小学校教師が水泳授業で重要視する内容が以下の3点であることがわかった。①自己保全能力の育成 ②生涯スポーツへの発展 ③泳げるようにさせること。①、②は水泳授業の2つの目的であり、③は学習指導要領に明記される内容であることがわかる。さらに、これらの意識の関係性については、水泳授業の2つの目的である①自己保全能力の育成と②生涯スポーツへの発展を、学習指導要領に明記されている内容である③泳げるようにさせることを通して達成させることができると考えていた。

2) 意識間の乖離

実際に行う授業の中においては、水泳授業が持つ官僚制的性格によって、教師の自由裁量の幅は狭められ、目標や内容に関する検討が十分にできず、決められた内容をどのように指導するかという指導方法に意識が限定されていることがわかった。先に述べた重要視する内容への意識と実際の授業内の意識は乖離している現状があるということである。



(図1 水泳授業に対する意識構造)

4. 結論

小学校教師は、水泳授業そのものへの意識の中では、目的と内容という関係の中で2つの方向性と「泳げるようにさせること」を重要視することができている。そうではありながらも、学校で決められた内容自体が教師の中で目的化され、指導方法に意識が限定されることによって、目的に意識が向かないということが起きていた。目的に意識が向かないということは、そうさせる体制に問題があるとも考えられる。学校における水泳授業あるいは水泳領域の体制改革を行っていくことが、今後の水泳授業を意味のあるものにするためにも重要になるのではないだろうか。

5. 主な参考文献

ロバート・K・マートン (1961) 社会理論と社会構造. 森東吾ほか共訳, pp. 179-189, みすず書房.